

バーンスタイン「ミサ」大フィル70周年で上演

米国の作曲家レナード・バーンスタインの劇場用作品「ミサ」が7月14、15日、フェスティバルホール(大阪市北区)で関西初上演される。大阪フィルハーモニー交響楽団の創立70周年を記念し、総勢200人が、宗教や権力など重いテーマを問いかける大作に挑む。



子どもたちを指導する井上道義(18日、大阪市西成区の大阪フィルハーモニー会館)

バーンスタインはミュージカル「ウェスト・サイド・ストーリー」や「キャンディード」などの作曲で知られる。ミサ初演は1971年で、米ワシントンのケネディ・センターのこけら落としのために制作された。

今回、井上道義が総監督・指揮・演出を手掛け、バーンスタインに師事した佐渡裕が助言役を務める。オペラケストラや歌手、合唱隊、バレエダンサーなど約200

信仰や権威 今を問う大曲



0人が出演。ミュージカルのように演技や衣装、舞台装置を伴う「シアターピース」形式で上演する。

物語は若いギタリストという設定の司祭を中心に展開する。祭礼が進む中、人々が信仰への疑念を募らせる。音楽はロックも入り乱れ、舞台上ではバレエダンサーも舞い踊る。混迷が極まったところで小さな子どもが一声で皆が歌い、平和を取り戻される。

公演2カ月前の5月から、特別に結成されたボーイソプラノ隊がいち早く稽古を始めた。オーディションで61人から選ばれた小学生18人が大阪市内の大フィルの練習場集い、歌や演技の練習を重ねている。

今月18日には井上が立ち会い、舞台上での動きなどを身ぶりを交え指導した。

兵庫県三田市の合唱団に所属する中学1年生、込山直樹君は重要なソロパートを歌う。将来の夢はオペラ

歌手だ。作品中の歌は「これまで歌ったものと全然レベルが違い難しい」といい、自宅でもピアノを弾きつつ練習しているという。「ソロで歌うと気持ちよくなる。この作品のおかげで歌がもっと好きになっっている」とほほ笑む。

ミサが制作された当時は、ベトナム戦争で人々に不安感や無気力がまん延していた。作品には平和への祈りに加え、キリスト教への疑問、社会的権威への批判が込められている。バーンスタイン自身が「この作品は私のすべてであり、私の人生だ」とも表現したという。しかし、批判性ゆえに世界的にも上演は少なく、知る人ぞ知る傑作といえる。司祭役のバリトン、大山大輔は「この体を通して、バーンスタインを再現する」と意欲を燃やす。

94年、最後に国内で上演された際に指揮・演出を手掛けたのも井上だった。司祭役にデーモン小暮風メーキヤップを施すなど、過激な演出が物議を醸した。文化庁主催にもかかわらず、バーンスタインの作品を管理する財団が「上演を認めない」と抗議。プログラムに「財団非公認」の注記を付けることで公演にこぎ着けた。

前回は「観客に『幕の内弁当を一気に10個食べさせてもらうよ』と言われた(井上)という。井上は「あのときは面白くやればいいと思ってた。今回はおもしろさは変わらないが、なるべくシンプルにやりたい」と、演出の狙いを語る。

米国での初演から最後の日本上演、そして関西初となる今回の公演とそれぞれ23年の時を経た。井上は「人間のアイデンティティーを問う作品なので、いつ上演してもいい」と普遍的意義を強調する。

もっとも、宗教的な急進主義が台頭し、テロが頻発する現代では「バーンスタインが描いた『何を信じるのか』という問題がより切実に響くかもしれない」とも指摘する。「宗教も、芸術も『あなたの問題だ』というところを感じ取ってもらいたい」と話す。

(大阪・文化担当 西原幹喜)

